

凸凹の白肌の美女のような建築

僕は25歳くらいまで、あまり“旅”をしたことがなかった。設計事務所勤めで休みがほとんどなかったことや、金銭的に余裕がなかったことが、その理由であった。もう一つ大きな理由として、“旅に行く目的”が、あの頃の僕には見当たらなかった。観光名所や古いお寺・神社などを見たいとも思わなかったし、どこかの名物料理を食べに行こうとも思わなかった。振り返ると少し寂しいがそうだった。独立して自分の建築をつくり始めた頃から、少しずつ旅行し始めた。その目的は、写真や図面の中の建築を確認するためであった。国内をいろいろ見て回った。そして1996年頃、とても熱中していた“建築家、ル・コルビュジエに逢いたい”という欲求に駆られた。いろいろ調べると、パリにたくさん作品があることを知る。

1度目の海外はパリのル・コルビュジエに逢いに行く。そして2度目に「ロンシャンの教会」(1950～55)へ。パリから早朝の電車に乗り、数時間でベルフォール駅に到着。駅から乱暴な運転だが親切なタクシーで丘を上り入り口へ。真冬の冷たい空気。薄曇りの空。その向こうに、白い“ゆず肌の美女”が姿を見せた。正確にいうと、白い“ゆず肌の美女”だと思い込んでいた「ロンシャンの教会」が姿を見せた。写真は何度も見ていた。リシンや漆喰のような、比較的白いマットな壁だと思い込んでいた。実際、「ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸」(1923)や「サヴォア邸」(1929～31)の壁はそれに近かった。しかしロンシャンの壁は、少し荒々しい感じすらする、スタッコのような表情をしていた。ショックだった。勝手な思い込みで膨らんでいた夢に、突然現実を突き付けられるという、人生の中で誰もが1度や2度、経験する感覚に近いといったらよいか。そんな思いで建物をグルッと回った。内部の白い壁も同じだ。外よりも寒く真っ暗な内部に開いた、奥行きのある開口。その光に照らされて白い凸凹の壁が浮かび上がる。凸は照らされ、凹は影となる。マットな白い壁とは違い、自然物の岩肌のような質感となる。再び外に出る。凸凹のおかげで、白に微妙な濃淡が表れている。晴天だと、きっと気が付かなかった表情だ。この建物の形状と大きさには、この凸凹の白い肌がふさわしいと確認できた瞬間。壁に近付くと足元の芝の上に、白い肌のかげらが。1つ拾ってロンシャンを後に。そのかけらは今でも机の上に飾ってある。大切なお守りのように。*



いがらし・じゅん——建築家／1970年生まれ。1997年、五十嵐淳建築設計設立。
現在、北海道工業大学、名古屋工業大学、東北大学非常勤講師。
主な作品：矩形の森（2000）、風の輪（2003）、トラス下の矩形（2004）、大阪現代演劇祭仮設劇場（2005）、Annex（2005）、Tea house（2006）、原野の回廊（2006）など。



上——曇天のロンシャン
下——線に落ちる白い肌